

県立図書館だより

平成25年6月

青森県立図書館報 第16号

特別展「寺山修司没後30年」開催

会期 平成25年7月13日(土)～9月8日(日)



寺山修司(藤巻健二氏撮影)

寺山修司は、詩・短歌・小説・戯曲などの文学活動に加え、前衛的な演劇活動を行い、社会に大きな影響を与えました。

昭和10(1935)年、青森県弘前市に生まれた寺山修司は、中学校時代から小説や詩、俳句を作り、ガリ版刷りの文芸誌「白鳥」を発行するなど、その早熟な才能を開花させます。県立青森高等学校在学中には全国の高校生の俳句雑誌「牧羊神」を発行しています。

早稲田大学在学中に「チェホフ祭」で短歌研究新人賞を受賞、昭和41(1966)年には放送詩劇「山姥」でイタリア賞のグランプリに輝きました。

寺山の率いる演劇実験室「天井桟敷」は、昭和46(1971)年にベオグラード国際演劇祭において「邪宗門」でグランプリを受賞。以後、多彩なジャンルで数多くの作品を残し、昭和58(1983)年に47歳で逝去しました。

今回の特別展では、新たに近代文学館蔵となった「ペルシアの市場にて」・「歌壇のカルテ」などの原稿、日本現代詩歌文学館蔵の「この中から歌集の題名を決めて下さい」と書かれた塚本邦雄宛書簡など、当館では初展示となる資料に加え、三沢市寺山修司記念館等の御協力を得て、遺品や図書、直筆資料などを展示し、青森・弘前・三沢・下北など県内各地とのつながりを中心に御紹介します。



野脇中学校文芸誌「白鳥」
寺山修司が中学3年生の時に中心となって編集・発行した



寺山修司原稿「ペルシアの市場にて」

『The 西洋骨董アンティーク』(昭和52年6月20日 読売新聞社刊)に発表されたエッセイ

文学講座のお知らせ

第1回
7月28日(日)

講師

清水義和氏

(国際寺山修司学会会長)

九條今日子氏

(テラヤマワールド代表)

佐々木英明氏

(寺山修司記念館館長)

第2回
8月18日(日)

講師

新谷ひろし氏

('雪天'主宰)

久慈きみ代氏

(青森大学教授)

目

次

特別展「寺山修司没後30年」開催	1
館内テーマ展示のさまざま	2
こんなレファレンスがありました	3～4
子どもの本の紹介	5
郷土資料の紹介	6
近代文学館資料の紹介	7
カウンターからひとこと	8

館内テーマ展示のさまざま

青森県立図書館では、館内至る場所でテーマ展示を行っています。

普段はそれぞれの棚の中に並んでいる本から、テーマを決めてコーナーに展示するのですが、どのようなテーマにしたら利用者の皆さんに興味を持ってもらえるだろう？とか、こんなキーワードからも本を選んで並べてみよう。とか、こんな飾り付けにしたら足を止めてもらえるかな？などと、図書館員が毎回趣向を凝らし展示コーナーを作っています。

児童閲覧室には5か所の展示コーナーがあります。



雨、カエル…
6月という季節にぴったりの展示です。



↑宮沢賢治の
絵本がズラリ！
←青森県出身
の児童図書作家



一般閲覧室は、6月26日まで“歌舞伎”がテーマです。

参考・郷土室では、近代文学館の企画展に併せたものや、旬な話題を取り上げています。



現在、県立図書館内で目にすることができる展示はこのようなテーマですが、次回来館した時には違うテーマの展示に入れ替わっているかも知れません。

館内を歩いて新しい発見をしてみませんか？

～ こんなレファレンスがありました ～
故郷（ふるさと）の話題読み語り 【第16回】



「きんぎょ～え、きんぎょ」



平成 25 年 6 月 9 日まで、青森県近代文学館では「北畠八穂生誕 110 年」展を開催しています。
 八穂さんは、当館児童閲覧室でも「[青森県を代表する7人の児童図書作家](#)」として特に取りあげて紹介している作家のひとりです。戦後間もなくから児童文学者として本格的な活動をはじめ、数多くの本と、雑誌掲載作品が残されています。

今回の展示で紹介されたなかに、昭和 24 年発行の雑誌『銀河』に掲載された「やっちゃ親父」と右の写真があります。青森市民の方でも「懐かしい」と思い浮かべる人は少ないのではないのでしょうか。

「やっちゃ飴」とは、大正から昭和にかけて人気のあった“やっちゃ飴屋”こと庄内安太郎さんの物売りのことです。

八穂さんは、棟方志功を描いた『かじやの鬼コ』（国土社 1978）でも“ヤッチャアメ”を書いていて、関野準一郎さんの挿絵とともに、天秤棒を担ぎ、人形芝居をしながら飴を売っていた様子が伝えられています。



北畠文庫（八穂さんのご家族からの寄贈資料）中の写真
 青森県近代文学館 所蔵

今回のご質問は、「やっちゃ飴」をご覧になった方からいただいたものです。

【質問】 青森では、他にどのような物売りがあったのでしょうか。資料はありませんか。

店舗を構えないで商品を持ち歩き販売することや、その人たちを行商といいます。

現在でも「焼き芋」「お弁当」「たこ焼き」・・・どうも、食べ物ばかり浮かんでしましますが、山間部の過疎地などでは、生鮮食品から生活雑貨まで、クルマいっぱい積み込んだ動くスーパーといったものもあり、高齢者の方々の生活の支えになっています。



『法然上人絵伝』
 第三十三巻 より

さて、この行商。『日本書紀』によれば、欽明天皇（539-571）のころには山背国（山城国：やましろのくに・現在の京都府南部の地域）の泰大津父なるものが伊勢に行商していた記事があり、平安時代には、『本朝無題詩』の中で京都を訪れる炭売の女性のことが書かれているという、たいへん歴史の古いものです。

また別に、「振売（ふりうり）・立売（たちうり）」とも言われていて、立売は路上を占拠して商売を営むことを指していますが、史料が乏しく、その実態は明らかではないようです。

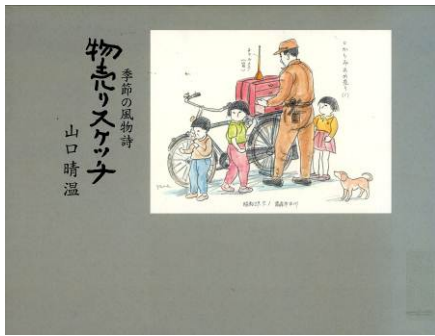
（参考資料『国史大辞典』）

一方、振売は、肩にかついだ棒に商品を提げて売り歩くもので、「やっちゃ飴」もその一つです。

古い歴史を持つ行商ですが、青森県内ではどのような物売りがあったのでしょうか。

さすがに欽明天皇の頃とはいきませんが、昭和 30 年頃から平成まで、絵入で数多くの物売りを紹介している本があります。

『季節の風物詩 物売りスケッチ』（山口晴温 北の街社 2006）



山口晴温さんは、ふるさと青森の情景を版画・絵画で表現し、多くの児童図書や新聞、雑誌などの挿絵を手掛けた方です。

物売りのスケッチは昭和 29(1954)年といえますから、晴温さんが 28 歳の頃、「からみあめ売り」がチャルメラを吹き鳴らしながら売る光景を見かけ、懐かしかったことがきっかけで描きはじめたそうです。

その後、半世紀あまりにもわたり続けられた取材の様子は、同書巻末に「取材雑感」としてまとめられています。

そこには、「生活の一端として描き続けた」と晴温さんが言うように、物売りの様を描いているだけではなく、スケッチに写真、産地に値段と聞きだす晴温さんが、税務署の人ではないかと噂されたり、時には、商売をはじめめるのかと真顔で聞かれたりもしたなど、日常の中で出会った人たちのふれあいの記録が残され、晴温さんにとっても貴重な宝物になったと書かれています。

スケッチには年月日と場所が記されていて、リヤカーで売っていた竿竹売りが、数年後にはクルマになっているなど、同じ商売でも人や年代によっての違いがわかり、150 を超えるスケッチは、私たちにとっても懐かしい思い出であり、貴重な歴史資料です。

この画集の中にあり、江戸の風物詩を平成の世まで伝え、これからの季節にぴったりの物売りの方のお話を紹介します。

菅笠に法被、地下足袋、大小の金魚が泳ぐガラス鉢を並べた桶を揺らさないように、そろりと歩く姿は、「きんぎょ～え、きんぎょ」のふれ声とともに城下町弘前の夏の風物詩として長く親しまれました。これは、決して遠い昔のお話ではありません。

黒石市の百田良蔵さんは、83 歳の平成 15(2003)年まで、30kg 近くある天秤棒を担いで弘前の街を売り歩いていました。思い出された方も多いのではないでしょうか。

金魚は室町時代、文亀 2 (1502)年に渡来したと云われています。

元禄(1688～1704)の頃に京坂から江戸に移入され、武士階級や、一部の富裕町人の愛好家によって珍重・飼育されていました。

明和(1764～1772)頃には、一般町民にも広がって、専門店も多くなります。行商も行われるようになり、そのふれ声も夏の風物詩となっていました。250 年ほど前のことです。

百田さんが商売をはじめたのは戦後間もなくだったといえますから、50 年以上になりますが、江戸から続く 250 年の歴史の、実に 1 / 5 にあたります。平成 13(2001)年 4 月 26 日の朝日新聞の記事では、日本中でも、もう 3、4 人しか残っていないと語っていた百田さん（当時 80 歳）も、間もなく天秤棒を担ぐのをやめ、平成 22(2010)年 5 月に亡くなられてしまいました。



俳優見立夏商人 金魚売り
歌川国貞作

山口晴温さんの画集によって、百田さんの姿をいつまでも見ることができます。トレードマークだった菅笠の下から「きんぎょ～え、きんぎょ～」の声が聞こえてきそうです。

● レファレンス申込み及び問い合わせ先

青森県立図書館 参考・郷土室 電話 017-729-4311

FAX 017-762-1757

電子メール sanko@plib.pref.aomori.lg.jp

子どもの本の紹介（第16回）

青森県立図書館では、毎月第2土曜日に児童閲覧室おはなしコーナーで、絵本の読み聞かせやブックトークを行うおはなし会を開催しています。

5月のおはなし会（11日〈土〉）では、青森県近代文学館で開催された企画展「北畠八穂生誕 110年」にあわせ、**青森県立青森中央高等学校の生徒の皆さん**と一緒に、青森県を代表する児童図書作家の作品紹介と読み聞かせをしました。

今回は、高校生の皆さんが読み聞かせした3冊の本を紹介します。

『なんげえはなしっこしかへがな』

北彰介/文 太田大八/絵 銀河社 1979（大 E 材タ*ダ A06A）

昭和 35 年に青森県児童文学研究会を創立し、県内の児童文化活動家として活躍した北彰介（きた しょうすけ）さん（1926-2003）の作品です。

この作品は、北彰介さんが幼い頃、毎晩のようにおばあさんから聞いていた昔ばなしの一部を詩的に書きなおしたものだそうです。津軽弁で語られる7つの昔話は、短いけれど、北さんが「果（はて）なし話」とよぶ、子どもたちにとってはどこまでも続くように思える「なんげえはなしっこ」なのです。

『かじやの鬼コ』

北畠八穂/文 関野準一郎/絵 国土社 1978（E セキノ*ジ 集密2）

青森市出身で、脊椎カリエスという病気と闘いながらも、数多くの作品を発表した北畠八穂（きたばたけ やお）さん（1903-1982）の作品です。

同じく青森市出身で、八穂さんが幼い頃一緒に遊んだ版画家 棟方志功さん（1903-1975）の幼少年期が描かれています。

『あくびでねんね』

神沢利子/文 沢田としき/絵 福音館書店 2009（小 E サダ*ト A06A）

青森市出身で、絵本作家、イラストレーターとして活躍した沢田としきさん（1959-2010）が絵を手がけた作品です。

日本を代表する児童文学作家の一人、神沢利子（かんざわ としこ）さんの表現する動物たちのあくびが、沢田さんの絵で、とても可愛らしく描かれています。



とても緊張したけれど、みんなが聞いてくれて、うれしかったよ！

この3冊のほかに、鈴木喜代春さん、なかのひろたかさん、白木茂さん、馬場のぼるさんの作品を紹介しました。



郷土資料 の 紹 介 (第 16 回)

去る平成 25 年 3 月、青森市在住の民俗学者、**田中忠三郎氏**が 79 年の生涯を閉じました。

昭和 8 年、下北郡川内町（現むつ市）に生まれた田中氏は、開墾した土の中から現れる瓶や石の破片に惹かれて少年考古学マニアとなり、下北アイヌの調査と縄文遺跡の発掘に没頭。

その後、「素晴らしい紋様のついた土器を見ると、これほど造形感覚の鋭い人々が、粗末な毛皮だけを纏っているはずがない。美しい衣で身を飾っていたに違いないと思った」（『図説みちのくの古布の世界』**田中忠三郎著、河出書房新社、2009**）ことから、調査研究の対象を民俗学の分野に広げ、特に衣服を中心とする県内の民俗資料の収集・保存に力を注ぎました。

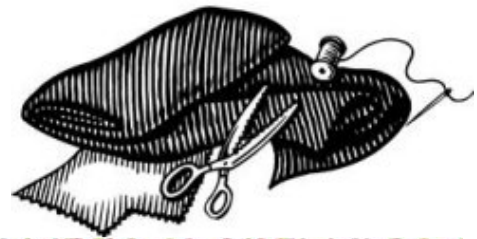
小川原湖民俗博物館館長や稽古館館長を務める傍ら、田中氏が私財を投じて集めたコレクションは 2 万点にも及び、うち刺し子着 786 点が国の有形民俗文化財、紡績用具 520 点が青森県の有形民俗文化財に指定されています。

中でも、麻の古布やくずなどをつぎはぎして衣類や寝具に仕立て上げたぼろのコレクションは、県外の研究者から「東北、青森は貧しいですネ」と哀れまれる一方、県内では「ボロやガラクタを収集、調査している」として「ずいぶんと長い間、痛烈な批判と冷笑を浴びた」（『下北 忘れえぬ人びと』**田中忠三郎著、荒蝦夷、2008**）といえます。

しかし、何世代にも渡って大切に受け継がれ、青森の過酷な寒さから人々の生命を守ってきたぼろに、田中氏は、家族の絆と物を大切にする優しさを見出していました。

それらは今、「限られた資源の再利用(エコロジー)、超絶技巧(テクニック)、愛情(エモーション)、経年美(パティナー)など、きわめて今日的テーマを示唆するテキスタイル・アート」、「消費文化の対極にある稀有なアートとして」（『BORO つぎ、はぎ、いかす。青森のぼろ布文化』**小出由紀子、都築響一編集、アスペクト、2009**）、欧米を中心に高い評価を得ています。

田中忠三郎氏のご冥福をお祈りします。



青森県立図書館では、青森県に関する資料や青森県内で刊行された資料、青森県在住者・出身者の著作物等を郷土資料として積極的に収集し、永く保存するとともに、県内外の皆様に広くご利用いただいております。

今回このコーナーで取り上げた資料は、いずれも館外貸出が可能です。ぜひご利用ください。

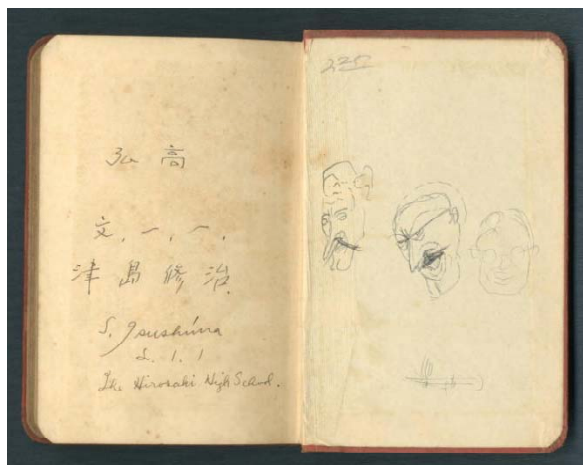
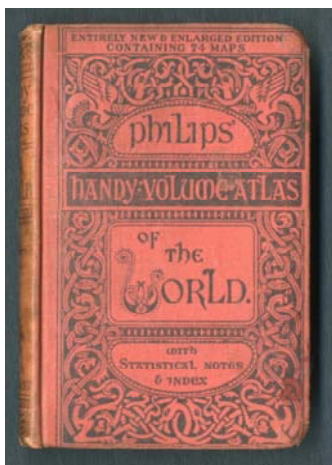
近代文学館資料の紹介(第16回)

太宰治の初公開資料と書画

「桜桃忌」の名で知られる6月19日は、太宰治の誕生日でもあります。太宰の故郷、旧・金木町（現・五所川原市）の芦野公園では、この日「太宰治生誕祭」が行われるのが恒例となっています。ちなみに今年は太宰治の生誕104年、没後65年に当たります。

青森県近代文学館では6月15日から30日まで、[スポット展示「太宰治の初公開資料と書画」](#)を開催します。公開予定の資料の中から2点を紹介します。

津島修治サイン入り地図帳〈初公開〉



太宰治は昭和2年に青森中学（現・青森高校）を修了、官立弘前高等学校（現・弘前大学）に進みました。

この地図帳は太宰が弘高時代に使用していた

もので、表紙の見返し部分に本名・津島修治のサインが見られます。まだ、この時期は、太宰治の筆名は用いていませんでした。

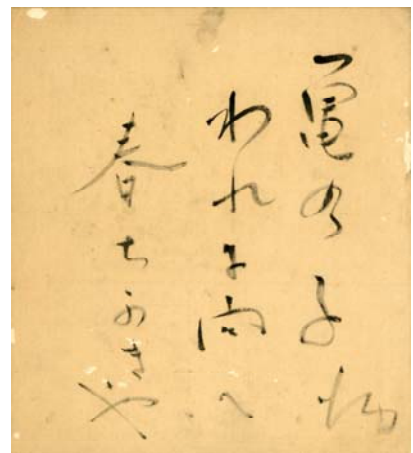
サインの脇には似顔絵のような落書きが描かれていますが、これは化学や修身のノートなど、太宰が遺した弘高時代の自筆資料の多くに共通する特徴です。

太宰と親交のあった藤野敬止氏から、甥の寺山敬正氏へと受け継がれ、このたび御遺族から青森県近代文学館に寄贈となった新資料です。

色紙「亀の子われに問へ春ちかきや」

太宰は東京帝国大学（現・東京大学）文学部に在籍していた昭和6、7年頃、俳句に凝っていました。朱麟の号を用い、友人たちとよく連句を行っていたと言われます。

この句は太宰が遺した自筆句帖「亀の子」（常設展示室で公開中）にも収録されているものですが、独立して色紙に揮毫されていることから、太宰お気に入りの一句だったことが窺えます。



カウンターからひとこと(第16回)



今回は、前回に引き続き「雑誌」についてご案内します。

雑誌の最新号については、一般閲覧室正面入口から右方に配架しています。

また、子育て支援コーナーに7誌、児童閲覧室内に4誌をそれぞれ配架しています。

一般雑誌架については、分類ごとに雑誌名札を色分けしましたので、資料が見つけやすくなりました。



(哲学・歴史・社会科学など、**分類別に色分け**しました。)

また、前回お知らせしたとおり、永年保存でないバックナンバーの雑誌については、「特別貸出申請書」により1週間以内の期間で貸出しできます。

バックナンバーを貸出することができる雑誌については、雑誌架に表示している雑誌名札に赤色のシールを貼り、わかりやすく表示することにしました。

バックナンバーの雑誌は紛失すると再入手が難しいことから、永く皆様の閲覧に供することができるよう書庫に保管（永年又は3年間）しておりますので、閲覧をご希望の際は、「閲覧請求票」によりカウンターにお申し出ください。

現在当館で所蔵している雑誌については、ホームページの“トップページ＞利用案内＞ご利用に際して＞資料＞雑誌一覧はこちら（[郷土](#)、[郷土以外](#)）”から確認できます。（<http://www.plib.pref.aomori.lg.jp/top/guid/infomation.html>）

～ プチコラム ～

一般閲覧室内に**子育て支援コーナー**が新設されてから2年が経ちました。

本年3月には、コーナーを拡大し、さらにゆったりと本を選べるようになりました！



青森県近代文学館や県立美術館、県立郷土館情報コーナーや、青森県の世界遺産・縄文遺跡情報コーナー、郷土の人々と出版コーナーも一新されていますので、ぜひご覧ください。

また、子育て支援コーナー、児童閲覧室、郷土の人々と出版コーナーも一新されていますので、ぜひご覧ください。